

女子学生の緑環境への接触頻度と接触意向

Frequency and intention of female students to contact the green environment

加藤 祥子

Shoko KATO

Abstract

I investigated the frequency of female students' contact with the green environment and their intention to contact the green environment. Many students were in daily contact with the greenery of the residential area around their homes and the roadside trees in the city. Also, when there was a garden at home, many students came into contact with the greenery of the garden on a daily basis. Students with a garden at home felt more in contact with greenery than students without a garden at home. Many students answered that they would like to come into contact with greenery on a daily basis in the premises of their home, in the city, or in the residential area around their home. On the other hand, some students live alone and live in houses without a garden. Even if there is no garden, it is important to place plants in the room and have the opportunity to come into contact with greenery on a daily basis in a familiar space.

Keywords : green environment, garden, indoor plants

1. 背景と目的

環境問題が深刻化する中、持続可能な社会の実現に向けて、2050 年までのカーボンニュートラルの実現を明記した「地球温暖化対策の推進に関する法律の一部を改正する法律案（改正地球温暖化対策推進法）」が 2021 年 5 月に成立した。その結果、日本国内での脱炭素社会の実現に向けた取り組みは重要性を増し、様々な分野でエネルギー消費の削減などが取り組まれている。一方、衣食住や人的移動などに起因する温室効果ガスの排出量は全体の 6 割以上を占め、個々人の行動が脱炭素社会の実現に影響を及ぼしている¹⁾。環境意識を尋ねた 2020 年の調査²⁾によると、「私だけが環境のために何かをしても、他の人も同じことをしなければ、あまり意味がないと思う」に対する回答は「賛成」が過半数（58%）であった。そして、18～29 歳（71%）と 30 代（69%）の若い世代が他の年代に比べて高い傾向にあった。

若年者の環境配慮行動を促す環境意識の向上を図ることが大切である。環境教育は、義務教育期間の中でも実施されているが、個別の消費行動などを自らの判断で行い、社会人として社会に出る直前の大学生にも環境配慮を自分事として身近に考え、実践につなげていく仕組みが必要である。

日常生活における自然との関りが少ない人は、リサイクルや環境保全活動への寄付などの環境配慮行動に消極的であるとの報告がある³⁾。さらに、子ども時代に自然の中

でよく遊んだ経験を持つ人は、自らと同様の体験を子や孫にさせる傾向が強く現れ、自然体験の有無が世代を超えて伝播する⁴⁾。子ども達へ自然体験の機会を提供することが長期的視点からも極めて重要であると指摘されている⁴⁾。幼少期の自然体験は、教育現場でもその重要性が認識されつつあり、小中学生を対象とした自然体験教室などが各地で開催されている一方、幼少期に自然に触れてこなかった市民が自然と関われるようにする手立てはあまり議論されてこなかった³⁾。

そこで、本研究では、学生の緑環境への接触頻度と接触意向などを調査し、学生と緑環境との関係の現状を明らかにし、日常生活における緑環境との接触と環境配慮意識とのつながりを検討する上での資料を得ることとした。

2. 方法

学生の緑環境への接触頻度や緑環境との接触意向などを調査するためのアンケート調査を、本学学生を対象に実施した。調査は、2018 年 10 月から 11 月、2021 年 7 月から 8 月、11 月、2022 年 5 月に行った。調査者から対象者に質問紙を配布し、回答を依頼し、回収した。2018 年に 63 部、2021 年に 41 部、2022 年に 86 部、計 190 部回収した。2018 年と 2021 年・2022 年の間には、コロナ禍の有無という社会状況の差があるが、回答の傾向に大きな差は見られなかったことから、3 つの調査期間の回答をまとめて分析することとした。

表-1 回答者の住宅の形態

住宅形態	自宅生・自宅	下宿生・自宅	下宿生・実家
戸建住宅	109 (81.3)	4 (7.1)	44 (78.6)
集合住宅	18 (13.4)	46 (82.1)	8 (14.3)
無回答	7 (5.2)	6 (10.7)	4 (7.1)
総計	134 (100)	56 (100)	56 (100)

(%)

表-2 各環境に対する緑量の評価

緑量の評価	短大周辺	自宅周辺	実家周辺
乏しい	0 (0.0)	6 (3.2)	2 (3.6)
やや乏しい	16 (8.4)	28 (14.7)	4 (7.1)
どちらともいえない	43 (22.6)	47 (24.7)	3 (5.4)
やや豊か	81 (42.6)	59 (31.1)	21 (37.5)
豊か	49 (25.8)	48 (25.3)	26 (46.4)
無回答	1 (0.5)	2 (1.1)	0 (0.0)
総計	190 (100)	190 (100)	56 (100)

(%)

表-3 生活に関する意見

生活に関する意見	(1) A自然と親しむ生活 B都市的な生活が良い	(2) A精神的にゆとり B物質的に豊かに	(3) A環境保護を優先 B利便性を優先	(4) A古いものを残す B新しいものに変える	(5) A屋外で過ごしたい B屋内で過ごしたい
Aに近い	61 (32.1)	86 (45.3)	20 (10.5)	53 (27.9)	11 (5.8)
ややAに近い	71 (37.4)	60 (31.6)	68 (35.8)	66 (34.7)	23 (12.1)
どちらともいえない	28 (14.7)	28 (14.7)	59 (31.1)	57 (30.0)	59 (31.1)
ややBに近い	25 (13.2)	13 (6.8)	36 (18.9)	12 (6.3)	40 (21.1)
Bに近い	5 (2.6)	3 (1.6)	7 (3.7)	2 (1.1)	56 (29.5)
無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.5)
総計	190 (100)	190 (100)	190 (100)	190 (100)	190 (100)

(%)

調査内容は、緑環境への接触頻度、接触意向、庭の有無、庭での利用行為、公園での利用行為についてとした。また、回答者属性にかかわる質問として、生活環境の緑量、生活に関する意見（価値観）、自宅の住宅形態を尋ねた。属性にかかわる質問以外への回答については、無回答のデータを除外して、クロス集計などを行った。

3. 結果および考察

(1) 回答者の属性

回答者の学生は、自宅生 134 名、下宿生 56 名であった。自宅生の約 8 割が戸建住宅に住まい、下宿生の約 8 割が集合住宅に現住であった（表-1）。また、下宿生の約 8 割の実家が戸建住宅であった（表-1）。

回答者の生活環境（通学している短大周辺、自宅周辺、実家周辺（下宿生のみ））の緑量を、「豊か」、「やや豊か」、「どちらともいえない」、「やや乏しい」、「乏しい」の 5 段階で尋ねた。短大周辺は、「やや豊か」であるとする学生が最も多く、自宅周辺や実家周辺も「やや豊か」と考える学生が 3 割程度であったが、実家周辺は「豊か」が 46.4% ともっとも多かった（表-2）。

生活に関する意見として、5 つの意見 A と意見 B に対して、「A に近い」、「やや A に近い」、「どちらともいえない」、「やや B に近い」、「B に近い」の 5 段階で尋ねた。5 つの意見は次の通りである。(1)「A: 自然と親しむ生活が良い」－「B: 都市的な生活がよい」、(2)「A: 心の豊かさや精神的にゆとりのある生活をするに重きをおきたい」－「B: 物質的な面での生活を豊かにすることに重きをおきたい」、(3)「A: 生活の利便性も大切だが、環境や自然の保護をより優先したほうがよい」－「B: 環境や自然の保護も大切だが、生活の利便性をより優先したほうがよい」、

(4)「A: 古いものにはこれまで受け継がれてきた良さがあり、できるだけ残していくべきだ」－「B: 古いものには今の時代にはそぐわないものがあり、新しいものに変えていくべきだ」、(5)「A: 自由時間はできるだけ屋外で過ごしたい」－「B: 自由時間はできるだけ屋内で過ごしたい」。

その結果、A の意見に近い、やや近いとする学生が多い傾向にあったが、(5)に関しては、自由時間は屋内で過ごしたいとする学生が多い傾向にあった（表-3）。自然や環境は大切であり、大切に生活を好ましいと考えられている一方、屋外で過ごすより屋内で過ごしたいと考えられていることが分かった。

(2) 緑環境と接触する頻度

「山や海などの自然（自然）」、「公園」、「街中の街路樹など（街路樹）」、「自宅周辺の住宅街の緑（住宅街）」、「自宅の庭（自宅庭）」、「自宅の室内の緑（自宅内）」の 6 種類の緑環境との接触頻度を「日常的にある」、「週に数回」、「月に数回」、「年に数回」、「まったくない」の 5 段階で回答を求めた。

χ^2 検定の結果、接触頻度は、環境ごとに有意な偏りがみられることが分かった。もっとも接触頻度が高かったのは、住宅街で、日常的に接する学生が約 7 割であった（表-4）。次いで、街路樹であった。自宅庭も約半数の学生が日常的に接すると回答していた。普段の生活圏内にある身近な緑は、接触頻度が高いことがわかる。一方、自然や公園は日常的に接する学生は約 2 割であり、4 割～5 割程度の学生は、年に数回程度接触すると回答していた。遠方であることの多い山や海などの自然とまったく接触することがないと回答した学生は 2 割であり、都市内にある公園では月に数回程度接触する学生が約 2 割であった。自宅庭および自宅内との接触頻度がまったくないと回答した学生

女子学生の緑環境への接触頻度と接触意向

表-4 各緑環境と接する頻度 (n=185)

接触頻度	全くない	年に数回	月に数回	週に数回	日常的にある
自然	37 (20.0)	87 (47.0) ▲	22 (11.9)	8 (4.3) ▽	31 (16.8) ▽
公園	25 (13.5) ▽	71 (38.4) ▲	43 (23.2) ▲	11 (5.9)	35 (18.9) ▽
街路樹	3 (1.6) ▽	17 (9.2) ▽	11 (5.9)	35 (18.9) ▲	119 (64.3) ▲
住宅街	9 (4.9) ▽	6 (3.2) ▽	7 (3.8) ▽	25 (13.5) ▲	138 (74.6) ▲
自宅庭	64 (34.6) ▲	13 (7.0) ▽	10 (5.4) ▽	10 (5.4)	88 (47.6)
自宅内	91 (49.2) ▲	17 (9.2) ▽	11 (5.9)	6 (3.2) ▽	60 (32.4) ▽

(%), ▲ χ^2 検定 ($\chi^2(20)=539.35$, $p<.01$) 後の残差分析により, 5%水準で有意に多い, ▽少ない。

表-5 自宅生と下宿生の各緑環境と接する頻度

接する頻度	全くない	年に数回	月に数回	週に数回	日常的にある
自然					
自宅生	26 (19.8)	64 (48.9)	15 (11.5)	6 (4.6)	20 (15.3)
下宿生	11 (20.4)	23 (42.6)	7 (13.0)	2 (3.7)	11 (20.4)
公園					
自宅生	13 (9.9)	49 (37.4)	35 (26.7)	9 (6.9)	25 (19.1)
下宿生	12 (22.2)	22 (40.7)	8 (14.8)	2 (3.7)	10 (18.5)
街路樹					
自宅生	1 (0.8)	13 (9.9)	10 (7.6)	23 (17.6)	84 (64.1)
下宿生	2 (3.7)	4 (7.4)	1 (1.9)	12 (22.2)	35 (64.8)
住宅街					
自宅生	5 (3.8)	4 (3.1)	4 (3.1)	19 (14.5)	99 (75.6)
下宿生	4 (7.4)	2 (3.7)	3 (5.6)	6 (11.1)	39 (72.2)
自宅庭					
自宅生	26 (19.8)	7 (5.3)	8 (6.1)	10 (7.6)	80 (61.1)
下宿生	38 (70.4)	6 (11.1)	2 (3.7)	0 (0.0)	8 (14.8)
実家庭					
下宿生	11 (20.4)	6 (11.1)	1 (1.9)	1 (1.9)	35 (64.8)
自宅内					
自宅生	50 (38.2)	13 (9.9)	9 (6.9)	5 (3.8)	54 (41.2)
下宿生	41 (75.9)	4 (7.4)	2 (3.7)	1 (1.9)	6 (11.1)
実家内					
下宿生	18 (33.3)	4 (7.4)	1 (1.9)	8 (14.8)	23 (42.6)

(%): 自宅生 (n=131), 下宿生 (n=54)

表-6 自宅生と下宿生の庭の有無と庭に接する頻度

各庭に接する頻度	全くない	年に数回	月に数回	週に数回	日常的にある
自宅生					
自宅庭あり (n=105)	4 (3.8)	6 (5.7)	7 (6.7)	10 (9.5)	78 (74.3)
自宅庭なし (n=26)	22 (84.6)	1 (3.8)	1 (3.8)	0 (0.0)	2 (7.7)
下宿生					
下宿庭あり (n=7)	1 (14.3)	1 (14.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (71.4)
下宿庭なし (n=46)	36 (78.3)	5 (10.9)	2 (4.3)	0 (0.0)	3 (6.5)
下宿生					
実家庭あり (n=42)	0 (0.0)	5 (11.9)	1 (2.4)	1 (2.4)	35 (83.3)
実家庭なし (n=12)	11 (91.7)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

(%)

表-7 自宅生・下宿生別および自宅の庭の有無による現状の接触機会への充足感

現状の接触機会	自宅生 (n=134)	下宿生 (n=51)	自宅庭あり (n=113)	自宅庭なし (n=72)	総計 (n=185)
不十分だ	4 (3.0)	5 (9.8)	3 (2.7)	6 (8.3)	9 (4.9)
やや不十分だ	39 (29.1)	18 (35.3)	25 (22.1) ▽	32 (44.4) ▲	57 (30.8)
どちらともいえない	31 (23.1)	10 (19.6)	28 (24.8)	13 (18.1)	41 (22.2)
やや十分だ	33 (24.6)	12 (23.5)	31 (27.4)	14 (19.4)	45 (24.3)
十分だ	27 (20.1)	6 (11.8)	26 (23.0) ▲	7 (9.7) ▽	33 (17.8)

(%), ▲自宅庭ありとなしの間の χ^2 検定 ($\chi^2(4)=16.43$, $p<.01$) 後の残差分析により, 5%水準で有意に多い, ▽少ない。

は, 他の環境に比べて多く, これは庭の有無や自宅室内の植物の有無がかかわっていると推測された。

自宅生と下宿生の接触頻度を見ると (表-5), ほとんどの環境では両者に大きな差は見られなかったが, 自宅庭に関しては, 自宅生は日常的に接する学生が約6割と多かったのに対して, 下宿生はまったくないと回答する学生が約7割と多かった。一方, 下宿生が実家庭に接触する頻度は, 自宅生の自宅庭の接触頻度と同様の傾向であった。同様に, 自宅内の接触頻度も自宅生に比べ下宿生の頻度が少ない傾向にあったが, 「実家の室内の緑 (実家内)」は自宅生の自宅内と同様の傾向であった。このことから, 庭の有無や自宅室内の植物の有無がかかわっていると考えられる。自宅生の自宅内, 下宿生の実家内の接触頻度がまったくないとする回答率は3割代と高く, 住宅内に植物を設置していない場合が多いものと推測された。

(3) 自宅の庭の有無と接触頻度

自宅生の自宅庭の有無と下宿生の自宅庭 (現住の下宿の庭) の有無および下宿生の実家庭の有無ごとの各庭との接触頻度を見ると, 庭がある場合は, どの庭でも日常的な接触が7割~8割と高かった (表-6)。このことから, 住まいの庭や住宅街の緑など, 身近な空間に緑があると, 日常的に緑に接する機会が多くなることがわかる。

(4) 緑環境と接触する現状の機会に対する充足感

接触状況に対する充足感を「十分だ」「やや十分だ」「どちらともいえない」「やや不十分だ」「不十分だ」の5段階で尋ねた。やや不十分と回答した学生が30.8%(n=185)と最も多く, 次いでやや十分24.3%, どちらともいえない22.2%であった (表-7)。十分が17.8%, 不十分が4.9%と最も少なかった。自宅生と下宿生別の充足感では, 両者の間に有意な偏りは見られなかった。

女子学生の緑環境への接触頻度と接触意向

表-8 各環境での緑への接触意向 (n=189)

接触意向	接したいと思わない	たまに接したい	日常的に接したい
自然	7 (3.7)	117 (61.9) ▲	65 (34.4) ▽
公園	16 (8.5)	120 (63.5) ▲	53 (28.0) ▽
街中	10 (5.3)	71 (37.6) ▽	108 (57.1) ▲
住宅街	11 (5.8)	71 (37.6) ▽	107 (56.6) ▲
自宅敷地	9 (4.8)	71 (37.6) ▽	109 (57.7) ▲
自宅室内	25 (13.2) ▲	73 (38.6) ▽	91 (48.1)

(%), ▲ χ^2 検定($\chi^2(10)=83.98, p<.01$)後の残差分析により、5%水準で有意に多い、▽少ない。

表-9 庭での利用行為 (n=151)

庭での利用行為	回答数	回答率
花や木の栽培	116 (76.8)	
洗濯物干し	69 (45.7)	
野菜の栽培	61 (40.4)	
庭の観賞	52 (34.4)	
工作や車洗浄などの作業	33 (21.9)	
動物の飼育や遊び場利用	26 (17.2)	
土遊びなどの遊び	6 (4.0)	
その他	4 (2.6)	

表-10 公園での利用行為 (n=190)

公園での利用行為	回答数	回答率
休憩	113 (59.5)	
散策	104 (54.7)	
遊具の利用	65 (34.2)	
運動	64 (33.7)	
花や木の観賞	35 (18.4)	
その他	4 (2.1)	

($\chi^2(4)=5.67, p>.05$)。

自宅庭の有無と接触状況に対する充足感の関係では、有無の間に有意な偏りがみられた。自宅庭がある学生では、ない学生に比べて十分と回答する学生が多く、自宅庭がない学生はやや不十分の回答が庭のある学生に比べて多かった。自宅庭がない場合、身近な空間での緑への接触頻度が低く、接触が十分に得られていると感じている学生が少ないのではないかと考えられる。

(5) 各環境での緑への接触意向

「山や海などの自然(自然)」、「公園」、「街中」、「自宅周辺の住宅街(住宅街)」、「自宅敷地内の屋外(自宅敷地)」、「自宅の室内(自宅室内)」の各環境において緑と接したいと思う程度を、「日常的に接したい」、「たまに接したい」、「接したいと思わない」の3段階で尋ねた。その結果、各環境における緑への接触意向には有意な偏りがみられた。自然や公園は、たまに接したいと考える学生が多く、日常的に接したいとする回答は他の環境に比べ少なく、3割前後であった(表-8)。住宅敷地や街中、住宅街では、日常的に接したいとの回答が多く、約6割であった。遠方の環境よりも身近な環境で緑に接したいと考えている傾向がみられた一方、自宅室内では、他の空間に比べ、接したいと思わないとの回答が多く1割程度見られた。屋内よりも屋外の身近な環境が緑と接する空間として考えられているといえる。

(6) 庭の利用行為

現住の住まいもしくは実家に庭があると回答した学生(n=151)を対象に、庭での利用行為を複数回答で尋ねた。その結果、「花や木の栽培」が76.8%でもっとも多く、次いで「洗濯物干し」、「野菜の栽培」、「庭の観賞」が4割前後となった(表-9)。庭はあるが、何も利用していないとの回答が8件(5.3%)見られた。植栽空間として庭が利用さ

れている場合が大半を占めることが確認された。

(7) 公園の利用行為

公園での利用行為を複数回答で尋ねた。その結果、「休憩」、「散策」を回答する学生が半数以上であった(表-10)。次いで、「遊具の利用」、「運動」が約3割となっており、「花や木の観賞」は約2割であった。

4. まとめ

学生と緑環境との関係の現状を明らかにすることを目的に、学生の緑環境への接触頻度や緑環境との接触意向を調査した。本学学生は、自然や公園には年に数回程度の頻度で接触しており、接触する機会が全くないとする学生も1割から2割見られた。一方、自宅周辺の住宅街の緑や街中の街路樹などには、日常的に接している学生が6割から7割見られた。また、自宅に庭がある場合、庭の緑に日常的に接する学生も7割から8割であった。身近な空間にある緑に日常的に接していることが明らかとなり、日常生活の場に、緑が存在していることが、緑をはじめとする自然物との接触に有効であることが確認された。その一方、自宅の室内の緑に接する機会が全くないとする学生は約5割と調査対象とした6つの環境の中でもっとも多く、自宅室内は、日常生活の中でもっとも身近な空間であるが、室内に植物を取り入れている家庭が少なかったことが起因していると考えられた。また、現在の緑環境への接触機会への充足感では、自宅に庭がある学生はない学生に比べて十分だと感じる割合が高く、日常的な身近な緑への接触が、充足感の向上につながっていると考えられた。庭は、主に花や木の栽培に利用されており、植物との接触の場となっていることが確認された。どの程度各緑環境に接触したいかの接触意向では、自然や公園はたまに接したいとする学生が6割程度であり、自宅敷地内や街中、自宅周辺の住宅

街で日常的に緑と接したいと回答する学生が 6 割程度であった。接触意向と現状の接触頻度は大きな乖離はなかったが、自宅庭との接触頻度は自宅庭の有無が大きくかわっていた。自宅敷地でもっとも日常的に接したいと回答した学生が多かったことから、庭は重要な接触の場であると考えられる。下宿をする学生のみならず、社会人になった際も、自宅を出て集合住宅などで一人暮らしを始める社会人も多く、ますます日常的な接触の機会が制限され、充足感が低下することにつながると予測される。自宅室内での植物利用の促進など、庭を持たない状況での身近な空間での緑との接触を増進させる方策を、若い世代に普及していくことなどが求められると考えられた。

引用文献

- 1) 環境省 脱炭素ポータル, https://ondankataisaku.env.go.jp/carbon_neutral/road-to-carbon-neutral/#to-spec
- 2) 村田ひろ子 (2021) : 脱炭素時代の環境意識 : 放送研究と調査 71(6), 80-103
- 3) 曾我昌史・今井葉子・土屋一彬 (2016) : 「経験の消失」時代における自然環境保全 : ワイルドライフ・フォーラム 20(2), 24-27
- 4) 上野裕介・安藤耕介・長谷川啓一 (2021) : 市民アンケートからみた親の自然体験の消失が子や孫の自然体験率に及ぼす影響 : ランドスケープ研究 84(5), 565-570

(提出日 令和 4 年 7 月 4 日)